



## \*\*\* ≪子育て・親育ち≫ \*\*\*

平成22年7月23日(金) 木の芽講演会より

楡の会発達支援センター 主任

臨床発達心理士 田野 準子

### ≪目次≫

- 1・はじめに
- 2・MY way …私の人生、ここに続くようになっていたんだ！
- 3・楡の会との出会い…楡の会式療育法＝石川院長の療育法
- 4・療育の目標って？…子どもの発達と育児を支援する療育
- 5・楡の会式療育の原点
- 6・乳幼児期～基本とする関わり方…子どもに関わる人の心得
- 7・母子通園の意義
- 8・障害のある子と親が越えなければならないハードルって？
- 9・受容するということ…子どもの発達に応じて受容もステップアップ
- 10・さいごに…伝えたい言葉



### 1・はじめに

日々通園に通われている、保護者の皆さん、本当に毎日子育てご苦労様です。今、ご紹介頂きましたように、私は楡でボランティアをスタートに、パート、そして職員として過ごしてきて、足掛け12年経ちました。

昨年度まで、クラスの担任をしていた時は、毎月の懇談の時間は短いし、昼のホールでも、なかなかじっくりとお話する機会が持てなかったのが、今日は私が長年温めてきた思いを皆さんにお話させて頂きたいと思います。今日は、全てのお子さんの育ちに共通している「子どもの育ち」の話をベースにお話をします。今日のテーマは「子育て・親育ち」という、あまり聞き慣れない言葉ですが、子どもはお母さん一人だけの力で育てるのではなく、みんなで育てて子は育ち、そして親も育っていくのだと言う思いを込めて、このようなテーマにしました。

### 2・My way …「私の人生、ここに続くようになっていたんだ！～楡への道

まず、私がかつて教師を目指したのは、小学校の2年生の時に素晴らしい先生との出会いがあったからで、その頃から「私は絶対先生になる！」と心に決めて、私の青春の半分を通してきました。どんな出会いだったかと言うと、もう半世紀も前の事になってしまっていますが、クラスに知的に遅れのある子や、貧困で子どもから見ても清潔にしているとは思えない子ども達がありました。でも、先生は本当に平等にみんなを集めて抱っこしたり、歌を歌ってくれたり、全ての子に等しく愛情を注いでくれていました。だから、みんな本当に仲が良かった。「なんて素敵な事なんだろう。私は先生になろう。前田先生



になろう！」・・・それが、はじまりでした。

大学時代には、教育大の後藤守先生から、私の子育て観の基本となっている『障害児教育は、全ての子どもの教育の原点である』・・・という事や、たくさんの事を教えて頂きました。33年前になりますから、本道では先駆けだったと思うのですが、北広島の若葉小学校の空き教室に後藤先生が開設したプレイルームで、研究室の仲間と一緒に自閉症のお子さんたちと定期的に関わる、貴重な経験をさせてもらいました。現在でも、お母さんたちから白い目で見られてつらい・・・という話を聞く事がありますが、当時は、自閉症は親の育て方が悪いからだ、親のせいだと世間で思われていた時代でしたから、お母さん達は疲れ切って暗い顔をしていました。当然ですよ。でも、お母さん達には、お子さんの障害が決して育て方によるものではない事をお伝えし、週1回だったでしょうか、回を重ねるうちに、お子さんと一緒に、お母さんも変わっていく・・・という姿を見て、お母さんを支える事が、子どもを支援するのに大切な事なのだと実感しました。



私の大学時代の研究テーマは「母子関係と言語発達」・・・母子の会話のやりとりのビデオ分析でした。こうして、この年になって自分の歩いてきた道を振り返ると、つくづく、「私の人生、ここ『楡』につながっていたんだ」と思わずにいられません。

さて、教師時代は、1. 2. 3年生を担当し、2年生になっても文字が書けない、上手に読めないお子さんがいましたが、クラスみんなで支えていく中で読み書きが出来るようになっていきました。「子どもって、集団の中で育っていくんだな～」と実感できる日々を過ごしました。



25歳で結婚して、夢にまで見た幸せなはずの子育てが始まったのですが、「こんなはずじゃなかった」・・・第一子の子育てはそう思わざるを得ないものでした。

それまで、12歳下のいとこもいて、子どもの時から見てきて「赤ちゃんって可愛いだけじゃなく、大変なんだ」と分かっていたつもりだったのに、「自分の子って、こんなに大変なの!？」と。とても過敏な子で、日中もちょっと音がすると目を覚まして泣いて、ずっと泣き続けている、とても育てるのが難しい子でした。夜中も、おっぱいを飲ませてやっと寝たな～と一緒に休むと、1時間もすると又起きて泣いて・・・ずっと睡眠不足で、可愛いわが子なのに辛くて投げ出したくなるような思いに駆られ、でも、そんな事を考える自分が悲しくて涙する思いもしました。2日違いで生まれた姉の子は良く寝る子だったので、義母にも「○ちゃん(姉の子)は泣かないし、良く寝るいい子なのに、●ちゃん(我が子)はずっと泣いてばかりで、どうしてなのだろうねえ」と言われ・・・「どうしてこんなに育てづらい子なのだろう？」おっぱい以外受け付けず、哺乳瓶も受け付けず、卒乳するまで他の人には預けられない・・・「自分でしか育てられない」という思いで子育てしていました。そんな中でも少し落ち着いてきたときに、今まで子どもの発達や色々な事を学んできたのに、それを生かしていない自分に気が付きました。

3歳児検診も、泣いて身長・体重を測ることが出来ず、扇風機、鳩時計、換気扇、排水溝などを怖がり、又、よく動き回る小さい子を怖がり、自分からお友達のところに向かっていく事がなかなかできない我が子・・・保健師をやっていた知り合いに「●ちゃん、ちょっと変じゃない？」と言われもしました。「社会性の未熟なこの子を、自分で何とかしよう！」と思い立ってからは、自宅に近所の子を集めて、みんなでダンボール遊び、ごっこ遊び、クッキングや読み聞かせ、おやつ時間も・・・我が家は、毎日がプレイルーム状態でした。半年間、登園時は毎日泣き続けていた娘でしたが、仲良しのお友達ができると、泣かずに友だちと一緒に楽しく幼稚園に

行くようになりました。娘なりに辛い時期を何回ものり越えて、今は自立して、自分の特性と向き合いながらも、自分の力を生かして頑張って楽しく仕事していますし、自慢できるほどに立派に生きています。



今、通園のお子さん達と過ごしていて「あ、うちの娘の幼いころと似ているな」と感じるお子さんがいます。そして「この子も力をつけてきっと変わっていけるはず！」と私は思っています。

様々な課題はあったとしても、とにかく友だちに向かっていく気持ちがあって、それを上手く育ててあげることができたら、必ず子どもは変わるし成長する！と私は信じています。

### 3・楡との出会い

今は19歳になる末の子が小学校に入学した年に、「何か自分の経験を生かせる事が出来れば・・・」と思い、当時楡の会に勤務していた友だちに紹介してもらい、ボランティアを始めました。それから足掛け12年間で、担任として、約200人のお子さんとお母さんとの出会いがありました。

「将来、自分で仕事出来る子に育てたい！」と1歳で入園してきて間もない頃から、しっかり先を見据えた子育てをしてくれているH君のお母さん。

「Sのおかげで親になれて、感謝している。自分が死んでもSが困らないように、育てたい」と話してくれたSちゃんのお母さん。なんて素晴らしいお母さん！

なんて素敵なのでしょう！子どもがどんなふう to 育てほしいか展望、希望を持って子育てしていく事は、全ての子どもの育ちにとって、とても大事な事だと思います。

「こんなに子どもの可愛い時間を、普通の子よりたくさん与えられ子育て出来て、私は幸せだと思う。」と話して下さったダウン症のT君のお母さん。「Hは神様からのプレゼントだと思っているの。パパもお兄ちゃんも、Hが可愛くて、Hのおかげでみんな幸せなの」と話して下さったダウン症のHちゃんのお母さん。障害という言葉は好きではありませんが、『ゆっくり育てている』という事を、こんなふう to 捉えて子育てしているお母さん達の姿も本当に感動です。

楡には0歳から通っているK君。K君のお母さんは、楡に来た当時から、「こんなふう to 言いたいでしょ？」「こう考えているでしょ？」という声かけをユーモアを交えながらK君に代わって言い続けてくれています。自傷のあったM君。M君のお母さんも又、入園当時からずっとM君の気持ちに寄り添って代弁し続けて、今は自傷が殆ど見られなくなりました。様々な療育の活動をK君もM君もお母さんも一緒に楽しんで過ごしてくれました。こうした素晴らしいお母さん達の存在が、私の頑張りの源の一つになっています。

卒園児のお母さんとお話して、一番うれしいのは「早くから楡に来て良かった。楡で色々な人と出会って、いろんな人の支えがあったから今の自分があり、子どもも成長できた」・・・というお話をしみじみとして下さる方が多い事です。それが、楡の会の職員である自分の誇りでもあり、楡の会と出会えてよかったという私自身の喜びにもなっています。

#### \*\*\*楡の会式療育法＝石川院長の療育法\*\*\*

楡に勤めてから、氏家院長、田崎院長、そして現在の石川院長と3人の院長先生が変わりました。院長が石川先生になってから、毎月1～2回定期的に研修会を行い通園職員は常に石川先生から療育法について学んでいます。



その療育法の基本は『障害児にも健常児にも適用できる子育て及び子育て困難に対する普遍的な理論とその理論に基づく実践方法』です。非常に難しい言葉のようですが、これは私がずっと理想としてきた子育ての理論化をしてくれる療育法でした。つまり、『当たり前の子育て』というのがベースにあって、プラスさらに子どもにとって分かり易い実践をしていく事を大事にする…という事です。特別な支援の視点や配慮は必要ですが、育ちに関わる目標は、障害の有無に関わらず全ての子どもに共通している。それが私の信条でもあり、石川先生の療育法は、実践的で非常に素晴らしいものだと思っています。

今から20年前と比べて、虐待の件数は何倍になっているかご存知ですか？20年で40倍になっているんです。それが何を意味しているかという、子育てそのものが、お母さん達にとって非常に難しいものになってきているということです。昔は子どもを育てる時に、おじいちゃん、おばあちゃん、親戚や自分の兄弟、近所のおばさん…支えてくれる人がたくさんいた。今は、そういう支えてくれる人がいる新米ママさんは幸せで、そうじゃないママさんがたくさんいる。そこで、子育てって結構大変な事なのに、子どもは可愛いというイメージだけで親になってしまった人や、周囲の理解がない環境や生活に余裕のない中で子育てしている人や、親としての心構えができないままに子どもを産んでしまった人や…結果的に虐待になるケースが増えてきてしまった。「人の子育ては本能ではない。学んでいないと子育ては難しい。」という事を、虐待件数が増えているという状況は示しているのだと思います。そして、その子育ての方法を、楡の会の母子通園の療育の中で、少しでもお母さん達に伝える事ができればと思っています。



#### 4・療育の目標って？

かつて療育イコール訓練と考え、目先の目標に親子の関係がはまってしまい、親子の関係が辛いものになってしまったり、「早期訓練で障害が治る」という考えが、障害そのものの受容を出来なくさせてしまう場合がありました。近年は、「変われる」けれど「治る」とは、言わない様になっています。



「心身ともに健康に子どもが育っていくこと」と「大きくなってから自立できること」と「幸せな人生をおくること」が、療育の先にある目標です。

『療育とは地域で健やかに育ち、豊かで充実した自分の人生を送ることが出来るように人を育てること』～これは小児科の医師であり、姫路市総合福祉通園センタールネス花北の所長である宮田広善先生の講演会で、先生がおっしゃっていた言葉

で、療育の目標を端的に示してくれる言葉だと思います。又、宮田先生が引用されていた大林泉先生の著作に書かれている『療育とは、子どもが持って生まれた力を生かすための援助であり、持って生まれた力そのものを変えてしまう『魔法の薬』ではありません』『…限りある能力でも力を発揮できないで空回りしてしまうか、いい環境の中で持てる力を最大限発揮するかで、充実感や生活の楽しさには大きな違いが生じます。ですから、子ども達の障害を持った部分への関わりは「治療」ではなく「療育」と呼ばれます。それは「障害をなくす」ことを目的とするのではなく、「障害の対処法」です。年齢とともに成長する子どもを育みながら、弱点をカバーし、持てる力を伸ばし、より生き生きとした生活をおくるために行うサポートです。』

という一節も、「療育とは何か」という問いに答えてくれる大きな指針の一つだと思います。

さて、療育の目標に向かって子どもの発達と育児を支援する療育についてのお話をしたいと思います。



「育児は親子の共同作業」…例えば、赤ちゃんが生後間もなく見せる「3ヶ月微笑」と言われるもので考えると、お母さんが、赤ちゃんにあやしかけると笑顔で可愛い笑い声を立ててくれ「わっ、可愛い！この子は私の声かけに答えてくれた！」「うれしい！」とお母さんは微笑み返すことになります。そのお母さんの微笑みが赤ちゃんにとっては「この人(ママ)は安心できる人、うれしい気持ちにさせてくれる人」として認知されてこの繰り返しが、母と子の絆を深めていく事になります。ところが、子どもの微笑みが少ない場合、お母さんの微笑みも少なくなってしまう。そうした繰り返しの結果、母と子の絆の形成が上手くいかなくなってしまう場合がある。親のせいでも子どものせいでもないけれど、共同作業が上手くいかないと、育児も難しくなる。そういう場合は、お母さんが表出の少ないわが子への対応の仕方(対処法)を学ぶことで、(つまりそれが療育になります)絆を深めることはできるのです。



「子育ては楽しいけれど、大変なもの」…普通に子育てしていても、子どもは親の思い通りにはなかなか動いてはくれませんし、いわゆる反抗期…本当は反抗しているのではなく、子どもが自己主張できるほどに順調に成長している証と考えて親が上手に対応してあげると、実は大変さを感じずに過ごせるのですが、それは特に第一子だと難しいので…  
一般的には、この時期は多くの親が手を焼く時期です。

障害をもっているから…ではなく、障害のあるなしに関わらず『この時期の子育てって大変なのね。人を育てていくって事は、全ての親にとって大変な事なのね。』という押えがあると、少し楽になれるのですが…。

「だけど」なのです。普通に育てても子育ては手のかかる事が多いのに、障害のある子はさらに育てにくく、難しい場合が多い…これも現実です。だから、療育のもう一つの大事な役割が育児支援になります。

子どもの発達を促すのは、子ども自身の意欲・関心であり、親の育児を促すのは子ども自身であり、子どもとの関係の中で親の育児への自信も育っていきます。こういう関係性の中で、療育の中で育児支援とは何か、療育の職員の役割は何かと言うと、「お母さんとお子さんがコミュニケーションでき、共同作業を円滑にできるように支援する事」という事になります。具体的には、子どもの意欲・関心を引き出すことが出来るように色々な楽しい活動(生活や伝統行事の経験も含めて)を考えて設定して継続して行う事や、視覚支援も含めて子ども達に分かり易く過ごしやすい環境を整えたり、問題解決の方法をお子さんの特性に応じてアドバイスしたり、時にはお母さんの苦労話を聞いて一緒に涙したり、その頑張りをほめたり、制度の利用などの情報提供や紹介をして支援する事です。

更には、クリニックと連携して、お母さんが疲労困憊している様などときにはDrの診察をお勧めし、時には薬を出してもらおう等してお母さんも楽になり、子どもと共にぐっすり眠ることが出来るようになる…という場合もあります。



## 5・療育の会療育の原点

私たちは石川院長から学んでいる「療育の原点」を常に忘れないように、子どもたちと向き合っています。

その原点とは、「療育者は、子どもの立場に立って子どもの心を推論して代弁して“凶星”を言い(子どもの心を言い当てる、代弁して言う)子どもに



とって真似し易い手本を動作的にも言語的にも呈示し、子どもにとっても親にとっても療育者にとっても、好ましい心の発達と好ましい行動(向社会的行動)を作ることを目指す。」と言うものです。

「動作的にも言語的にも」と言うのは、同時に呈示するとすごく分かり易くなるからです。つい先日も、K君のお母さんから「♪とんがり とんがり♪」(体操)でおつき〜く、ちっちゃ〜くという動作を常に言葉と一緒にやることで、K君が「大きい・小さい」の意味が良く分かるようになったという話を聞きました。

「大きいね」「小さいね」と言葉だけで言うよりも、手振り・身振りや声の大きさも加えて、表情や体で具体的に表現したほうが伝わり易い、分かり易いという事です。



この「楡の会療育の原点」が、乳幼児期の自立に向けての具体的手立てとなります。子どもに限らず夫婦もそうだし、友達もそうなのですが「相手に分かってもらえた！」と言うのは、何よりうれしい事ですし、この人は信頼していい人なのだ、安心、信頼につながるのです。そして、この人には分かってもらえると見えるから、なんとか自分の思いを伝えようとするのです。つまり「分かってもらえた感」は意欲・自信・安心につながる。「分かってもらえた感」は、コミュニケーションの力を伸ばす。・・・子どもの持てる力を伸ばしたいと思ったら、「分かったよ。～なんだね。」という言葉と共に、心から子どもの気持ちに寄り添って共感する事・・・それが子どもの成長につながります。お母さん達は、まず言葉の遅れを心配される方が多いのですが、日常会話の中での言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションの割合は3割対7割と言う説があります。

言葉は便利で大事なコミュニケーションの道具ですが、実は、コミュニケーションにおいて表情や手振り身振り、言葉の抑揚など言葉以外の要素の方が勝っているという事です。納得できないのに「いいよ」と不満そうな顔で返答しても、相手には「あの人はホントはいいと思っていない。」と伝わってしまいます。「わかったよ！」と怒った顔で言っても相手には「わかっていない」と伝わります・・・言葉より言葉以外の要素が勝る例です。そう考えると、先ほどのK君の例もそうなのですが、非言語的な要素も非常に重要で極端な話、それだけでも十分にコミュニケーションが可能だということにもなります。

言葉にしないと伝わらない事も確かに多くありますが、目は口ほどに物を言うという格言もあります。恋人同士なら目と目でお互いの思いを確認し合います。

こもれび園のお子さんも、「どっちがいい？」と選択する時に、チラッと視線を向けた様子で、「あっ、こっち？ 青い紙がいいのね。オッケー」と分かってあげる事が出来ますし、指の先を動かして意思を伝える事が



出来るお子さんだと、指の先にきれいな羽根をつけてあげて、微かな動きでも分かりコミュニケーションがしやすくなった例もあります。楡の会で使っている「楡ジェン」は楡の会式ジェスチャーサインの略称です。分かり易い手本の一つで、動作と言葉を同時に呈示します。手本を示し、子ども達が真似できるようになると、生活の中で、コミュニケーションがとり易くなり、過ごし易くなる＝生活するのに役立つという事になります。

## 6・乳幼児期～基本とする関わり方・・・子どもに関わる人の心得

楡の会式療育の具体的な方法について、お話していきます。

### 1・子どもの立場に立って考える～気持ちの受容・共有、共感を示す。

子どもが得意な事と得意でない事を理解する。



これは、子ども達と向き合う姿勢の基本で、例えば、自分の思いを上手に言葉にできない●君が、自分の隣に座った児を叩いてしまった場合、「そっか～○君が隣に座ったのが嫌だったんだね～」「そっか～嫌だったんだね。分かったよ」とまず叩いてしまった事を責めることなく、子どもの思いを言葉にして受容し代弁します。この「そっか～」「そうだね」「そうだったんだ～」などの言葉は、受容する時の最初の言葉としては、とてもいい言葉だと思っています。後に続く言葉を、子どもの心に寄り添う形にしやすくていい言葉です。

そして、●君の発達段階によって、叩かれた子に職員が「ごめんね。●君隣に座って欲しくなかったんだって。」と謝ってモデルを示したり、又は「嫌だったけど、叩いたから○君痛かったって。ごめんねしようね」と●君の手を取って、○君の腕をさすって謝るようにリードしたり…。危険を伴わない限り、どんな場合も、子どもの気持ちを受容する事から始めます。

得意な事と得意でない事を理解する…と言うのは、石川先生が「得手を伸ばせば不得手はついてくる」と表現していますが、粘土遊びが嫌い＝不得手な子の場合、まず、経験が少ないからか、感覚的に苦手なのか様子を見つつ、極端な感覚過敏でない場合は、ボール遊びが好きな子であれば、粘土のボール遊びから始める。そして好きな遊びを利用しながら、手を変え品を変え少しずつ粘土遊びの楽しさがわかるように繋げていく。ホールでマイクから流れる音声が苦手で、耳を塞ぎ保育室に入ってしまうKちゃんも、ホールの遊びが大好きなカラーボール遊びだと、保育室から出てきて、苦手な(嫌いな)はずの音声がホールに流れている中でも、耳を塞ぐことなく楽しく遊んでいる姿がある。つまり、得手でない事も得意な事があれば＝嫌いな事も好きな事があれば、無理なくそれでカバーできる場合がある。



それを知っておく事も大事な事だと思います。

## 2・凶星を言う＝子どもの気持ち、感情、思い、欲求、願望、動作などを大人が言い当てて、代弁し、子どもが分かってもらえている事を感じる事が出来るように、“受容”する。

“凶星”、代弁などの言葉は、今までの話の中にも何度も出てきましたが、これは療育の中核をなしているからだと思って下さい。受容については、後で又お話しますが、これは子どもの言いなりになることではありません。「あなたの気持ちはわかったよ。」と受け止める事。そして否定せず、言葉にしてあげる事。これが大事な事です。Mちゃんは、丸いものは「バルーン」と言います(Mちゃん語)。園バスに乗っていると、車窓から丸いものが見えると「バルーンだね」と言って、お母さんや職員に同意を求めます。「そうだねバルーンあったね。大きい丸いタンク。バルーン見えたね」その言葉で納得し安心して次の「バルーン」を探します。受容され、分かってもらえた事が、Mちゃんにとっては満足感につながっているのです。虐待を受けてきた子は、親に共感も受容もされず、分かってもらえず育つ。そうすると、自分はどうせ分かってもらえない…と人への信頼感もコミュニケーションの力もやる気さえも失せてしまう場合が多いそうです。私達自身も…全ての人と言って間違いないと思うのですが、共感・受容は大事な事だと思います。

## 3・言語動作同時に、真似し易い手本を示す。～できる事や得意な事を生かして「簡単にできちゃった」感を作り、達成感・満足感を作る。



これも、既にお話してきた事ですが、これは是非お母さん達もどんどんやって欲しいなどお勧めしている事です。真似が出来ると「やった。良かった。僕も、私もできた！」と満足が得られるからです。発達段階では、まずお母さんの真似、それから好きな先生が出来ると先生の真似。お友だちに関心が向くようになると、お友だ

ちの真似と言う風にステップアップしていきます。…真似、模倣はいいことです。そして真似が出来たら、褒めて、一緒喜んであげて下さい。真似することで、満足が得られ、満足することは、「よし、又やってみよう」というやる気につながるからです。やる気を育てることが、子どもの発達につながります。これは楡のお子さんに限らず、全ての子に当てはまる事なのです。

「簡単にできちゃった」感を作る為には、お子さんの発達の段階を知っておく事も必要です。まだ単語が2、3語と言う段階のお子さんに言葉の手本を示す場合、幼児語で「ワンワン」「ブーブー」など繰り返しのあるオノマトペ(擬音)が真似し易い手本になります。感触遊びの時は、「ペタペタ」「サラサラ」など、擬態語などをいっぱい言いながら楽しく遊ぶと良いですし、2語文のできたお子さんなら、「赤い粘土があったね」「大きいケーキをいっぱい作ろう」など、形容詞・助詞も意識した短文のお手本でお話すればよい事になります。

## 7・母子通園の意義

朝9時45分時までに登園して、帰宅するのは午後2時半～3時。冬ならあつという間に外は暗くなってくる時刻です。お母さん達の毎日のご苦労を思うと、頭が下がります。家事もあるし、楡に通うお子さんの兄弟・姉妹のいるご家庭は、更に本当に大変だと思います。でも、どんなに大変でも、母子で通う事がどうしても必要で、意義のある事なので、楡では特に新入園のお子さんは、母子通園を基本にして、皆さんに来て頂いています。どんな意義があるかと言うと、大きくは次の5つの点です。

①場の共有・経験の共有は、子どもが表出した事の(言葉以外も)理解を  
し易くする。…例えば、帰宅後、突然子どもが「アンクンクン」と言ったりします。その日、療育中に部屋にアンパンマンの着ぐるみを着た先生が登場したのをお母さんが一緒に経験していれば、「アンクンクン?あ～あ、アンパンマンだな」と察しがついて、「そうだね。今日アンパンマンが、ばななさんにきたね。良かったね～」と、子どもの言いたかった事に共感できて、言葉を返してやる事が出来ます。



場の共有をしていなければ、なかなか「アンクンクン」さえ分からないし、「う～ん、アンクンクンね～なんだらうね」で終わってしまいます。この返しができるか否かが、実は子どもの育ちに非常に大きな差を生む可能性があるのです。分かってもらえた子は「お母さんが分かってくれた。僕が言ったことで分かってもらえたんだ。又今度言ってみよう!」と、子どもの大きな喜びと意欲・自信に繋がります。逆に、せっかく「アンクンクン」と思っていた事を伝えようと言ってみたのに分かってもらえなかったら…。伝えようという意欲さえなくなってしまうかもしれないのです。言葉の発達のゆっくりなお子さんにとっては、重要な母子通園の意義だと考えています。

②お母さんの「感性」のトレーニングも含めて、子どもにとっても、お母さんにとってもモデルとなる人がいることで、関わりの学びの機会が広がる。…「感性」と言うのは察しの良さ、勘の良さです。これはもともと、とても良い方もいますし、意識してトレーニングすれば身に着くものでもあると思っています。楡に通われているお母さんの中には、とても子どもの気持ちを読むのが上手なお母さんがいます。そういう感性の優れたお母さんの言葉や行動を見て、他のお母さんが「ああ、これはそういう事だったのね」と子どもの言動を理解できたりします。つまり、お母さん同士も、モデルがいることで自分の感性のトレーニングになり、「こういう時はこうすればいいのね」と子育て上手になれる可能性があるという事です。

Uちゃんのお母さんは、トレーニングして感性を磨いた一人です。入園当時は、Uちゃんが怒って激しく

泣いた時、お母さんは、どうする事も出来ずにいる時が多くありました。でも今では「あれかな？これかな？」記憶と想像力を総動員して代弁し凶星を言い当てています。思いがわかってもらえるので、Uちゃんはすっと気持ちの切り替えができるわけです。そのおかげで、Uちゃんは見違えるほどに穏やかに過ごせるようになりました。「今まで生きてきた中で、一番頭を使っています。頭が良くなったかも」と笑顔で話すお母さん。本当に素敵です。努力が必要ですがそれを乗り越えると「母も子も楽になる」というご褒美がある…その例です。

又、ほめ上手なお母さんは、自分の子だけでなく、他のお子さんをタイミング良く褒めてくれます。これも又子どもにとっては自分のお母さん以外のお母さんから褒められたという喜びと自信を生み、褒めることが少なかったお母さんならば、「ああ、このタイミングで褒めると、子どもは頑張れるのね」と学ぶことになるわけです。

### ③将来の健やかな育ちのために、しっかりと愛着・母子の信頼関係を確立する

ための一緒に過ごす時間となる。…これも、非常に大事です。特に、共同作業が上手くいかないで、お母さんと子どもの信頼関係・愛着を築くことが出来ないで来た場合は、ここ楡に母子で通園する中でそれを回復する。基盤作りをするのです。



ここで1年間、母と子がしっかり向き合える色々な活動を通して、お母さん自身も担任や他のお母さん達との関係の中で支えられながら、子どもは「お母さんは僕にとっては安心の存在。安心の基地なんだ」とお母さんを信頼できるようになり、それがベースになってお母さんから先生、先生からお友だちへと関係が広がり、そして(お母さん以外の大人＝担任を安心の基地とする)単独日のある次の1年に繋がっていくのです。

### ④意欲を引き出す楽しい活動とその感情を母子で共有し、共感の経験を積み重ねることが出来る。…

例えば、特に母子通園1年目のクラスでは、「親子遊び」の活動を継続して取り入れています。お母さんの膝や抱っこやおんぶで歌に合わせての揺れ遊びや、くすぐり遊びなどを通してお母さんとのスキンシップを楽しむためです。最初は苦手でなかなか参加できなかった子どもも、回を重ねるうちに「お母さんと一緒に遊ぶのって楽しい！」「もう一回！」「…と、表情やサインで楽しさを表現するようになります。「お話遊び」も「制作」も…一緒に楽しかった！という経験と感情の共有の積重ねとなり、それに応えてお母さんも「楽しかったね、面白かったね、頑張ったね、もう一回やろうか」など声にして共感してあげる事が出来、それは帰宅後もその日の共有の経験として再現したり、会話のきっかけとなります。それが母子の絆を深める事に繋がるのです。

⑤困っている事を一人で抱え込まず、他のお母さんや担任に話を聞いてもらったり、相談したり、解決策を講じ易い。…お母さん同士で「～そうだよ。ほんとに困っちゃうよね」「そうそう、うちの子もそうだよ。ほんとに嫌になっちゃう」と、お互いの悩みや苦労を話す中で、「私だけじゃないんだ」「ここでは、私の気持ち



をわかってもらえる人がいる」と思える事や、「●が鍵を開けて外に出るようになったの。困ったわ」という悩みにも、「家は○がカギを開けるようになって困って、大家さんにOKもらって、高いところにもう一個鍵をつけて解決したよ」…と、具体的な解決策を同じ悩みを持つお母さんから、教えてもらう事が出来たりします。

担任も又、お母さんの困りごとに対しては、時には聞き役になり、時には一緒に悩みながらも、なんとか解決策を考えていきます。母子通園は、「お母さんの味方」「お母さんの理解者・応援団」をいっぱい周りにつくことに繋がるのです。お母さんの味方を増やす事が出来る事…これも大きな役割だと思います。

## 8・障害がある子と親が越えなければならないハードルとは？

これも、先ほどお話した、宮田先生の講演会で、先生の話の中で強く印象に残ったことで、ハードルのポイントは4つ。

- 1・障害の発見・告知の時
- 2・就学をする時
- 3・学校を卒業する時
4. 親が高齢になった時



1.については、ここにいらっしゃる皆さんは既に経験されて、まだ心揺れながらも、なんとか越える事ができている方が多いかと思います。

2.就学する時について、昨年卒園され、小学校の特別支援学級に就学したD君のお母さんから、先日聞いた話をまずご紹介します。D君のお母さんは、D君にとって一番楽しく過ごせるのはどこか、色々と自分の目で確かめて「ここなら大丈夫」と思える学校を選びました。D君は楡では殆ど給食を食べなかったのですが、それが心配の一つでもありました。ところが、学校に行ったら給食を完食しているとの事。「学校に行くまでは、本当に心配で心配でしょうがなかったのに、学校に行ったらね、あんなに心配していたのが嘘のようになった」色々心配したけれども、いや～こんなになるとは思わなかった。」と笑顔で話してくれました。

養護学校に行ったT君のお母さんも「担任の先生たちは、楡の先生達と同じように、温かいお日様みたいな愛情でT(君)を包んでくれています。毎日通う学校が安心して生活できるのは親として嬉しい事です」と伝えてくれました。

乗り越える時は、みんな辛くて、不安でいっぱいです。

でも、その時、お母さんが我が子のために一生懸命考えたりやっことは、必ずお母さんにも子どもにもプラスになって、良かったという思いとなって、きっと返ってくる…卒園、退園されたお母さんからお話を聞くたびにそう思います。



さて、これから経験するであろうハードル(厳しい関門)をステップ(楽な踏み台)にするために、子どもの未来を見通して、心しておかねばならない事があって、それが次の4つになるかと思います。これは、楡のお子さんだけでなく、全ての子どもに共通して言える事だと私は考えています。

### ①最終的に「親離れ、家離れできる子どもにする。」自分でできることをやれる子どもに育てていくこと…

子どもによってできることは違ってきます。基本的な生活習慣の自立が可能な子は自立できるように、寝たきりで介助の必要なお子さんは、指先で自分の意思を伝えられるのであれば、親以外の人にも自分のやりたいことは主張できるように育てていく。そのためには、生活の中で「愛されている安心感、認められている自信」を持つことが必要で、それがあれば親を離れて、社会で生きていく事は可能になるのだと思います。

非常に残念なのは、かつてはこもれび園でも、年長さんは単独がありました。胃ろうの子も呼吸器をつけている子も、お母さんを離れて、お母さん以外の大人(担任やセラピストや看護師)に思いや要求を伝える力をつけていく必要があるから単独日があったのですが、今は制度が変わってできなくなってしまいました。お母さんにとっても、お子さんと離れる時間は絶対必要だと思っているのですが…できれば、こもれび園の子もお母さんを離れる時間を作って、社会で生きていく力をつける最初の一步を作ってあげたいと思います。

②「乳幼児期にお母さん(養育者)との安心できる関係をしっかり作ること。」…お母さんがいれば、僕は大丈夫。お母さんが誰より安全な基地なんだという確固とした安心を作ることが大事で、この養育者は、お母さん



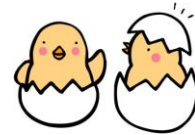
でなく、お父さん、おばあちゃん、おじいちゃんでもいいのです。主になって育ててくれている人が安心の基地になってくれれば、子どもはしっかり育っていく。安心が作られた中で、自分は家族にとって大事な存在なのだという自尊感情を育てていく。この自尊感情が「僕はこれでいいんだ」という自信に繋がり、それは発達の基盤ともなっていきます。

### ③「私の元気なうちは・・・」から脱却する。④「周囲の人と折り合いをつけて生きる技術も育てる。」・・・

とても遠い先のことの様に思えるかもしれませんが、「親がいなくなっても他の人に自分の思いを伝えられるコミュニケーション(言葉でなくともいい)の方法を身につけるために・・・自分で選び、自分で決める力＝



成人になった時に生きていくのに必要な力を身につけるために、今ここでこうやって私はこの子を育てているのよ」という将来の見通しをお母さんが持てるか否かで、子どもの育ちが違ってくるとだろうと思っています。そして、子ども達は十分に受容されて安心の関係が築かれた上で、将来他の人と折り合いをつけて生きていけるように、その成長に応じて基本的なしつけとけじめをつけることを学んでいき、時には叱られる事も体験しながら成長していく事が必要だと考えています。



## 9・受容すること

受容と言う言葉を既に何十回と使ってきましたが、「受け入れる」と言うのは、相手の全部を認めその通りにすること。「受け止める」と言うのは、思い通りにはさせられない場合があることを見据えたうえで、相手の思いに共感し認めることです。受容で大事なのは、この「受け止める」ことです。

『受容とは、基本的信頼関係を前提に受け止めることであり、全てを受け入れることではない。子どもの発達に応じた受容の形がある。思いを受け止め、代弁し、否定はしない。』



子どもの思い通りにはできない時も、否定はしないのです。行動修正が必要な時は、「そうか、～だったんだね。じゃあ、～はどう？」「～～したかったね。それじゃ、●と○どっちがいい？」「～だね。じゃあ、こんど～しようね」と、提案・選択肢を示すことで子どもの気持ちに歩み寄り、折り合いをつけることとなります。それがつまり、『否定せず、受容する』ことなのです。そんな巧いこといかない！・・・と思う方もいるでしょう。当然です。確かに難しいです。親だって感情の浮き沈みはありますし、上手くいく時ばかりじゃない。でも・・・

退園児のY君のお母さんは、Y君が1歳半で入園したころは、毎日の激しいY君のパニックに「死にたくなる」と言って、泣いていたお母さんでした。それが、石川院長の療育法を信じ、大変な思いをしつつも、受容することに努め、3歳のY君は自閉症の特徴的な症状が殆ど目立たなくなるほどに成長しました。そのお母さんが「石川先生は魔法使いみたい。クリニックの待合室で、お母さんに向かって怒って叫んでいる子に石川先生が一声掛けただけで、静かになった」と教えてくれました。石川先生の言うところの、「凶星を言い当て、子どもが受容されたと感じる」ことが出来るとこうなる・・・という現場を目の当たりにしたのだと思います。



先日、たまたま用事でクリニックに行くと、今は4年生で、退園児のK君が、もう診療時間も終了し、人もまばらな待合室で大声で怒って叫んでいました。K君は「トミカで遊びたかった！」と泣き叫んで繰り返します。お母さんは「分かったけど、だから、もう遊べないって言ってるでしょ！！」お母さんの疲れもピークで、受容できない状態

だったのでしょ…この繰り返しで、K君の怒りは段々お母さんを蹴る、叩くまでにエスカレートしてきました。事情を聴いて、「そうだねK君はトミカで遊びたかったんだね。遊べなくて残念だったね」と様子を見ながら繰り返し声をかけましたが、かなり興奮していたので、声をかけただけではもう収まらな思考え、受付から、紙と鉛筆を借りてきて『トミカであそべなくてごんねんでしたね。こんどきたときにトミカであそびましよう。やくそくします』と書いて、K君に見せ渡しました。1分後には、K君は靴を履いて玄関に。自販機でジュースを買って何事もなかったように、帰って行きました。その後ろ姿を見ながら、K君のお母さんがどんなに辛かろう…、よく手を上げなかった…そして汗をかいて怒っていたK君の辛さをも思うと、涙が出ました。もっと早く…助け船を出せなくてごめんなさい…お母さんに申し訳ない思いでいっぱいでした。



受容することは、確かにお母さんにとっては厳しい時があるでしょう。お母さんも疲れきっている時は、分かっているも感情に任せて子どもに対応してしまう時があっても仕方ない…。でも、理由が分かっている子どもが泣いたり怒ったりしているときの早道は、やはり「受容」なのだと思います。苦しくても、どんなに大変でもこの「受容」の意味と効果をお母さんが理解し、子どもに受容の声かけをすることで、お母さん自身が絶対、必ず楽になれるのです。そして何より、分かってもらえないと、もがいて苦しんでいるお子さんがスッと楽になれる。わがままとか躰の問題ではなく、ここは療育の考えで対応しなければならない部分なのだと思います。

「ダメって言っているでしょ！いい加減にしない！」というお母さんの一喝で我慢？できる子もいるけれど（理想的な叱り方ではないですが）それが出来ない特性を持っているから、支援が必要なのですから…。

お母さんが受容できる精神状態であるためには、周りの理解と協力が不可欠です。お母さんが疲れすぎないように、困った時は、遠慮しないで周りに協力を求める事が出来る様な社会になってほしいと願っています。

「子どもの発達に応じて、受容もステップアップ」…これは、受容の基本に沿いつつ子どもの発達や成長に応じて対応法をステップアップする必要があるということで、ポイントは次の5つです。

- \* 今の子どもの発達段階と育ちに必要なものを知る
- \* 折り合いをつけることが出来るようにするための大人の知恵とスキルアップ
- \* 信頼関係が成立してからは、時には毅然とした対応も必要
- \* 集団の中と家庭での子どもの見せる「顔」の違いも知っておく
- \* 様々な事の最終的な主導権・決定権は大人（担任・親）であることが前提



「受容」が子どもの言いなりになる、行動を止められない…という事に繋がるようでは、「受け止める」ではなく「受け入れる」になってしまっています。これは、乳児期の場合ならもちろん「言いなりになってあげる」事も必要ですが、（＝自分の思いが分かってもらえたという喜びを作る。自分の事を分かってもらって願いを叶えてもらえたという安心感と自信を作る為）子どもがもう単独での集団生活の経験を重ねているような時期には、それは、間違った学習をさせてしまう、不適切な対応となる場合があると考えています。

例えば、十分に担任にも受容され集団の生活も継続してきている通園単独2年目のH君がトイレの時間に「おしっこは出ない。ホールで遊んでる。」と集団から飛び出そうとした時に、担任から「行きたいのね。分かったよ」～なんて言葉はかけてもらえません。「今はみんなでトイレに行きます。おしっこはしなくてもいいから、みんなと一緒にトイレに行きます。」とか「今はみんなでトイレに行く時間です。おしっこがでないなら、〇先生のお手

伝いしてお部屋にいてください」ときっぱり担任に言われます。これは、安全上必要な事なので、きっぱり(毅然とした態度で)言う事で、子ども達は集団の約束事として感じ取っていく訳です。

又、危険な事や約束事に対しては「そこは危ないから上ったら×です。こっちならいいよ」「もう食べないなら給食は片付けます。食べるなら座ろうね」など、集団経験の年数に応じて、否定形を含む場合も出てきます。特に習慣付けしなければならない事や集団生活に必要な約束事に関して、担任は言ったことは譲りません。子どもがひっくり返っても泣いても、譲りません。(これはしっかりと子どもの成長を見届けてからです。子どもの体調の悪い時も別)「担任は、譲ってくれない事がある。担任には敵わない。先生の言う事には従わなくちゃ。」という関係を築いておくことも大切だと考えているからです。



子ども達がこれから社会の中で生活し易くするために、自分のやりたい事や気持ちに折り合いをつけて、集団行動をとることができるようにするためにはこうした毅然とした対応も必要であると思っています。そして、子どもの発達に応じて、親子の間でも、同様の対応が必要になってくるとも思っています。

お母さんは、誰より一番甘えることが出来る存在ですから、子どもはお母さんにはわがままな顔を見せます。できる事なのに、できない顔を見せて泣いてみたり、助けを求めたり、甘えてやってもらおうとしたりします。

某総理大臣が、ママから9億円に上るお小遣いをもらっていたという仰天ニュースがありました。私たちも自分自身が親になってからでも、実家に帰省すると(親が元気なうちは)つい甘えてしまう事があるでしょう。

発達途上の子どもにとって、単独日はできるけど、母子登園日はできない=しないというのはある程度仕方ない事なのです。ですが、担任から「～が出来るようになりました」と伝えられている事なら、お母さんと一緒だとできない=やらないからと言って「この子はやっぱり、まだ～できないんだ」と考えず、「何でお母さんと一緒ならやらないの!」と怒る事もせず、「できる」力はあると信じてあげて下さい。「●君のかっこいいところみたいな」「●君が～できるの待っているよ」「～できるよね。一緒にやってみようか～」「がんばれ!がんばれ!」・・・お子さんの発達によって声かけ方は違っても、又、無理強いすることはありませんが、「お母さんは●君が～できるのを応援しているよ、信じているよ」というお母さんの姿勢が肝心です。

子どもにとって「お母さんは僕が(私が)～はできると思ってきている。」と感じられることが、自信と誇りに繋がるからです。お話の初めの方で伝えたように、コミュニケーションは言葉にも増して、非言語的な要素が有効だという話を思い出して頂くとありがたいのですが、特に子どもはお母さんの感情を敏感に読み取るので、信じてもらっていない時は(どうせ、ママは僕が出来ないと思っているのさ。いいよ、ママの思っているようにして行動してあげるよ)と、ますます「やってくれない」事になるのです。なかなか難しい事ではありますが、子どもの持っている力を信じる事・・・それが子どもの力を発揮させることにつながるのです。

乳幼児期に、たっぷり認め、受容しつつ育てて、信頼関係を築くことが出来たら、親は子どもの言いなりにならないように、振り回されない様な関係作りが大切になります。育てる人と育てられている人、守る人と守られる人・・・この関係は(何十年か先は分かりませんが当分は)逆転することがなく、最終的な決定権は親にある事を、子どもの心に理解させた上での受容・・・順調な親子関係の成立を前提として、社会で生きていく子を育てるために・・・子育てにとって大切な事だと思っています。



## 10・さいごに…伝えたい言葉

今までお話したことのまとめにもなりますが、子育て中の皆さんに、是非お伝えしたい事、おすすめしたい事をお話します。

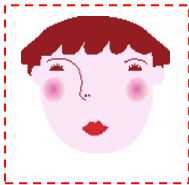
①「ほめて育てる」すすめ。…誰だってほめられることは嬉しい事です。ほめられると怒る子もありますが、その場合はほめ方を変えて見て下さい。又、ほめるポイントは、子どもの成長・発達に応じてステップアップさせる必要があります。ほめ上手は育て上手。叱るよりほめよ…です。

どこの場面でほめたらいいのかわからない、今は、どんな場面でどんなほめ方をする  
といい発達段階なのか…と悩んだ時は、担任に相談して下さい。



②「子どももっている力を信じる」すすめ。…既にお話したことの繰り返しになりますが、誰だって無限の可能性なんかは持っていません。でも持てる力を十分に発揮させるためには、それを信じて当然できるはずのことのちょっと先の目標に向けて、応援してもらえる事が重要です。子どもにとっては、お母さんにできると信じてもらい、できた時に「やったね！」「立派だね！」「がんばったね！」と、できた事を一緒に喜んでもらえる事は、幸せな経験であり、次のがんばりの原動力になります。そのためには、子どもの成長を理解し、ステップアップに必要な応援をする事が大事です。お母さんが、子どももてる力を信じる事ができないで、過小評価することは、子どもにとってはとても不幸な事ですし、伸びようとする芽を摘んでいることにもなる場合があります。

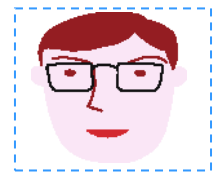
③「思い通りには育たないけれど、思っているように育つ」…誰の言葉かもう思い出せないのですが、若いころに読んだ本の中の一節で、私の子育ての軸でもあります。親子といえども、別の人間です。ですから、親が子どもを思い通り、望み通りにし向けようとしても、それは無理な事です。ただ、親から見て、「この子は意地っ張りだけど、優しい子なのよね」「全く手がかかるけど、頑張り屋だと思うわ」「甘えん坊だけど、いろんな事分かっているのよね」…と、子どもに対して親が思っていること、自分への評価(親が自分をどうみているか)を子どもは感じ取るので、(②にも通じますが)子どもに対しての肯定的な思い、見方が大事です。



④「母と子は線でつながっている」と思うすすめ。…これは一番多くのお母さんにお伝えしてきた言葉です。お母さんが不安であれば、子も不安になります。お母さんの気持ちに揺らぎがなければ、子も落ち着いて過ごすことが出来るようになります。泣いている子の気持ちを収める事が出来るのは、お母さんの穏やかな気持ちなのです。大変さの渦中にある時は、なかなかこれは難しい事で、できなくても仕方ないと思いますが、少しお母さんの気持ちに余裕が出

てきたら、是非思い出してほしいのです。実際、卒園・退園された子のお母さんにお会いすると、「後で振り返ると、親子は線でつながっているってほんとにそうだと思った。私がイライラしている頃は、〇もかんしゃくをおこして大変だった」と話してくれます。

お母さんが心穏やかに過ごすためには、家族や周りの人の協力が必要ですし、24時間営業の母業に、たまには「休業日」という訳にはいかななくても「休憩・自由時間…余暇」をなんとか作って、リフレッシュタイムが持てるといいなと思っています。そのために、利用できる制度は最大限利用して、お母さんが心の調律のできる状態に…心穏やかに過ごす事ができるように願っています。



⑤「世間体よりわが子の育ちが大事」と思うすすめ。…「そんな事言たって…」と即、反論が出そうですがT君のお母さんは、T君がスーパーに買い物に行くと必ずエレベーターのボタンを自分で押したがつて、混んで

いるときは、自分で押せないと押せるまで怒って泣くので他の人から変な目で見られるし困る・・・と話していました。難しい選択なのですが、お母さんに「知らない人たちの冷たい視線よりT君の満足作りを大事にしてい



いのでは？」と伝えました。「混む時間帯を避けて行って、少ない人になら『ごめんなさい。ボタンを押させて下さい』ってお母さんが言えるよね。待たないでいいようにしてT君に押させちゃう。・・・T君を連れて、そこにどうしても買い物に行かねばならないなら、大きな迷惑をかける限り、世間の目、世間体は二の次に考えて、T君のブームの満足作りをしてあげた方がいいと思う」と。ブームは十分満足すれば、大抵の場合次の事物に変わっていきます。

ブームは好きな事ですから、胸を張って我が子の為に、ちょっとごめんなさいと言って我が子の満足作りをしてもいいと思うのです。社会もそのくらいOKしてくれる人が必ずいると思っています。大変だったでしょうが、空いている時間帯に買い物に行く事にしたお母さんは、T君の満足作りを優先しました。ブームは夏休み前に始まり、冬の前にはもう去ったと聞きました。

⑥「今の苦勞・頑張りは、将来の苦勞・頑張りの10分の1」と思うすすめ。・・・皆さんは、もう十分に頑張ってきていると思います。人は疲れてくると、いつも出来ている事が嫌になったり、出来なかつたりします。ですから疲れた時には是非「今私は、将来の頑張りの10倍の効果がある事を頑張っているのね。」と自分を励まし「偉いな、私って」と自分をほめてあげて下さい。子ども達が今必要で身につけようとしている事、特に親子や人との関係作りの部分で、今が10段階の1の苦勞だとしたら、今それをやらずに過ごして、あと5年後にやろうとすると、10の大変さになるかも知れない・・・ならば、今、頑張った方がいいかな～と。少しだけ気持ちが楽になれるかなと思います。



⑦「お母さん一人で頑張らない。頼れる人に頼る」すすめ。・・・今日のテーマと関係しているのですが、子どもは社会の中で育っていくのに、お母さんが子どもを「自分でしか育てられない」と思い込んでしまうと、非常に追い詰められた気持ちになってしまいます。お母さんをそういう気持ちにしてしまう社会や環境が悪いのですが、自分自身を追い詰める前に、苦しくなったら、思いきって周りの人に頼る事が出来るようになって欲しいと願っています。私自身も人に頼る事がなかなかできない人間でした。でも、まだ子ども3人が幼い頃に自分が寝込んだ時に、近所の友達に頼るしかなく、頼ってみると、とても楽になれたのです。他人に頼る事・好意に甘える事は、人に迷惑をかけることではなくて、他人を信じる事なのかもしれません。「無理！！」と言う方は、最大限制度に頼って利用して下さい。そのために困った時は、相談室を気軽に利用して下さいようお勧めします。

⑧「怒ると叱るは違う」と心に止めておくすすめ。・・・親子の関係が出来ていれば、子どもの発達に応じて、社会のルールや危険な事は叱ってでも教えなければならない時があります。例えば、ADHDの診断を受けているからと言って、スーパーの中で自由に走り回っていいという事にはなりません。動きの多い特性は認めつつ、社会のルールとの折り合いをつけて行動することを学んでいく事が、生きていくために必要な事です。そういう意味では、子どもにとって、叱られる経験も必要になってきます。怒る・・・は、「腹が立って」「頭にきて」と言うように不快な表情で感情をあらわにすることで、不快さを子どもに伝えることになります。ですから子どもの不快な感情・・・怒りも誘う事になります。子どもに自分の感情を伝える時には、第3者の視点で声かけする事が出来てき



ていたら「叱る」事が出来ている事になり、叱って教えた事になります。難しい事ですが、是非心に止めて欲しい事の一つです。

⑨「子どもの成長には波がある。発達的に戻ってしまったように思えても、それは次のステップへの準備」と思うすすめ。…自分の持っている玩具を他の子に貸さなで、「Hくんの！！」と両手で抱え込んで、一人占めする姿が見られるようになる子達があります。「前はちゃんとお友だちに貸していたのに～」とお母さんは(退行?)と急に不安になる方が多いのですが、これは、友達と遊ぶようになる前のステップで、「自分のものだ」という所有の意識がはっきりしてきた姿である場合が多いのです。発達的には2歳を過ぎたころから、ちょうど主張する力が付いて、意地悪に見える行動も出てくる段階です。この時期の次に、自己主張と共に、譲ること、順番を待つことなどの自己統制を学んでいくのです。大人も子どもも、心も体も波があります。「あれ？」と思う事があつたら、成長の兆しかな～としっかり見守ってあげることが一番かなと思います。

⑩「親バカ」のすすめ。…親バカと言うのは、子どものいいところをいっぱい見つけて、ほめて伸ばしましょう！という意味です。我が子のいいところは敢えて意識しないと、なかなか見つからないという方が多いので、以前、私は初のクラス懇談の時は、お子さんのいいところ・可愛いところ・長所をお母さんに言ってもらっていた時期がありました。



動きが多くって手を焼かせるし、乱暴だし…そんなT君が、お母さんが体調不良でソファーに寝ていると、傍に来て頭を撫でてくれました。(もしかすると、偶然そういう行動を取っただけかもしれませんが、でも)「ありがとう！優しい子だね」とお母さんが声に出して伝えることで、T君は優しさを自覚し、更に優しい子に育つチャンスになるのです。良い方に考える。いいなと思ったら、声に出してほめる。…親バカ大賛成です。

お皿を運ぼうとして、落として割ってしまったKちゃん。お母さんの対応は…「割れちゃったね。せっかく運んでくれたのにね。ありがとうね。こんど落とさないように頑張ろうね」…Kちゃんはお母さんのお手伝いが大好きな、3年生の頑張り屋の女の子に育っています。



「神経質」は几帳面、「こだわり」は癡り症、「こわがり」は慎重…  
こだわりと言う言い方でマイナスに受け取っている事の中に、  
親バカ視点に変えるとプラスになることが実はいっぱいあります。

靴箱に、脱いだ靴をきっちりと揃えて並べないと気が済まないT君。

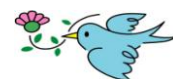
お母さんは「どうでもいいことに、こうやって時間がかかるのだから…」とため息をつきます。確かに、お母さんが急いでいる時はイライラもするでしょう。でも、「上手に靴を並べる事が出来て偉いね」そうほめてあげる事も出来るのです。T君のお母さんに、プラス思考をお勧めしましたが、自称「大雑把な性格」のお母さんにはなかなか難しい事でした。でも、是非親バカになって、お子さんの『いいところ見つけ』をいっぱいして頂きたいと思います。

子どもも親も完璧なんてありません。完璧な子育てなんてありません。子どもも親も、わかっちゃいるけど、理想通りになんてなかなかできないし、それが現実です。

でも、つまずいたり、迷ったりしながら、今日の努力は必ず明日の子の育ち・親の育ちに繋がる事を信じて子ども達の健やかな育ちと未来のために、みんなで一緒に子育てを頑張りましょう。

今日、お話したことで、少しでも皆さんのお役に立つことがあれば、嬉しいなと思っています。

長い時間ありがとうございました。



最後に、「みんなのねがい」という全国障害者問題研究会で出版している雑誌の中にあった言葉を、ご紹介  
します。お母さんが、お子さんに障害について語った一節です。

『…わが子は、特別な扱いを受けて、自分が社会的弱者であることを尻込みしました。私は言いました。「障  
害と言うのは、社会的支援制度を利用するために、大人が作った単なる記号。別に“あいう”でもいいんだよ』』

(註) 全文、お母さんと表現している部分は、主たる養育者の意味です。お母さん以外のおばあちゃん  
おじいちゃん、お父さんの場合もあると思いますが、お母さんという言葉で記述させていただきました。  
ご了承ください。

引用させて頂いたこと : 石川院長の療育法、石川院長の研修会で学んできたこと全ての一部

在園・卒退園児のお母さんからお聞きしたお話

宮田広善先生の講演会でのお話

引用文献: 「こころをラクにあたたまをクリアに」 大林 泉著

みんなのねがい コラムから一節

